

## 二人で出動する消防車も

### 鈴鹿の消防士は国基準人数の63%しかいない

11日の市議会本会議一般質問で、私は不足している消防職員の実態を明らかにし、増員計画のペースアップを求めました。

消防の設備や人員配置の基準は、消防庁の告示「消防力の整備指針」で決められています。鈴鹿市は基準に対して、消防車などの設備は100%、34台が満たされています。ところが、マンパワーの職員の方は、基準の219人に対して138人と、ひじょうに配置が遅れています。

基準では消防車1台に乗るべき人員は5人、少なくとも4人とされています。しかし鈴鹿市で実際に出動している人員は、下の表のようになっています。なんと、7割が2～3人乗車で、基準を満たす4～5人乗車は3割しかありません。

市内5ヶ所の消防分署に交替で張り付く職員は、鈴峰が4～5人、北・西・東が5～7人、南が7～9人ほどですが、救急車が出動すると必ず3人が乗っていきます。その間に火災出動があれば、残りのメンバーを総動員して署を閉めて出ますが、その結果3人乗車が多くなり、2人しか乗らないこともしょっちゅう起こります。鈴峰や救急車2台の南（白子）では、残りが1人となり署のすぐ近くで火事があっても消防車が出せない事態もありえます。

これでは、市民の安全・安心は保証されません。私は川岸市長に、消防職員の増員計画を前倒しすること、児玉消防長には、少なくとも異常な2人乗車はなくし、4人乗車を増やす工夫を求めました。

H18年に火災出動した消防車（75件）の乗車人員の内訳

乗車人員	5人乗車	4人乗車	3人乗車	2人乗車	合計
延べ台数	18台	42台	113台	31台	204台
割合%	8.8	20.6	55.4	15.2	100

# 鈴鹿の図書館予算は全国水準の半分

昨年から市立図書館の図書購入予算が、3千万円から2千万円にバツサリ減らされましたが、これを全国水準から見ると、恥ずかしいほどの低さであることが分かります。（図書館年鑑より引用）

市区町村立図書館の資料費決算額

鈴鹿市立図書館	2000万円
人口20万人以下の市区平均	4637万円
人口8万人以下の市区平均	2657万円

鈴鹿市と同じ人口規模の市では、図書購入費は平均4637万円で、減らす前の鈴鹿市の1.5倍です。また、人口8万

人以下の市でも平均2000万円を超えています。いかに鈴鹿市の予算がもとも少ないのか、それを減らしたのがいかに乱暴だったのかが一目瞭然です。

昨年は予算減によって、図書購入冊数はその前年より3700冊も少なくなりましたが、1冊当りの単価も1797円から1543円に下がっています。つまり、高い本を買うことを控えているのです。見た目には変わらないように見えても、このような状態が続くと必ず図書館のレベルは落ちていきます。「文化」とはそういうものなのです。私は、せめて図書費をもとの3000万円の水準に戻すことを求めています。

---

## 税金の納め方、12回払いなど工夫を

今年は市民税の大増税が行なわれ、その支払いも大変になってきました。私は11日の本会議で、市税を払いやすいようにすることを求めました。市民税、固定資産税は4期、国保税は8期という払い方を、払う側の都合に合わせて12回の月払いにするなどの工夫をすることです。市民の半数のサラリーマンは、すでに給料からの天引き方式の12回払いになっているので、難しいことはありません。

今でも納税課で申請すればできる場合もありますが、「どうしても払うのが大変」という事情が認められたときに限定されます。私はこのハードルを下げて、少しでも市民の納税意欲を上げるような対応を求めました。

また、納期から遅れた時にかかる「延滞金」は、「罰金」的なものであり、「悪質な滞納」に限定すべきである、なんとか頑張っただけでも遅れてしまった場合などは適用しないことを求めました。

# 深夜、自衛隊が市内一周「行軍訓練」

8月30日夜から31日明け方にかけて、陸上自衛隊久居駐屯地の第1中隊が鈴鹿市の市街地で「行軍訓練」を行ないました。31日に住民から「夕べ家の前の道を、たくさんの自衛隊員が鉄砲を持って歩いていった。一体何があったのか？」との情報が寄せられ、市役所に問い合わせた分かったものです。

## 無礼な自衛隊の態度、中に入れず説明もせず

市役所への届けによると、訓練参加隊員は67人、全員が小銃を装備した軍服姿で行進、白子港から出発、磯山 合川 国府 中央道路 神戸 箕田 海岸堤防 白子港と、のべ38.5キロを11時間半かけて回ったということです。



久居駐屯地の門前で押し問答

真夜中に市街地を武装して行進とは、尋常ではありません。内容の説明を求めて9月5日、共産党中野県書記長と市議団で久居駐屯地に出かけました。

ところが、事前に自衛隊に連絡、日時を約束してあったのに、「第1課長」小田氏という人が門前にいて「ここで話を聞く」と、門の中に一步も入れようとしません。訓練のことを聞いても「私の担当でないので、伝えておきます」という無礼な態度に終始しました。怒りを通り越して、あきれました。会うつもりも聞くつもりもないなら、断ればこちらも行かなかったのに、「どうぞおいで下さい」と言っておいて門前払いするとは、ホントに非常識です。よほど、いろいろ聞かれるとまずい事情があるようです。三重県各地で行なっているというこの「行軍訓練」、さらに調査をしようと思います。

---

**今年のコメは豊作でした** 1反だけ作っている田んぼで、今年も稲刈りをしました。今年は4月に選挙もあって、放任の「無農薬」でしたが、取り入れてみると7俵半もありました。夏の猛暑のときに、水を満タンに入れてイネを冷やしたのが良かったのかと思っています。

## アメリカが抱える「重病」

話題のマイケル・ムーア監督の映画「シッコ」(SiCKO)は、超大国アメリカがどうしようもない重病に罹っていることを、告発している。これまでの作品のような権力への突撃取材ではなく、普通のまじめなアメリカ市民に寄り添って「豊かな国の貧困」という現実、するどく斬り込んでいる。

アメリカには公的な健康保険制度が、いまだにない。人々は民間会社の保険に入って、「自分の健康を自分で」守っている。ムーア監督は、保険に入れない貧困層ではなく、保険に入っている中流の世帯でも、ちょっと重い病気やケガにかかったら、あっという間にホームレスになるという恐ろしい事実をいくつも突きつける。「こうなったのは、自己責任だろうか?」と。

### 失いかけた命が、「敵国」に行ったら救われた

ムーアはカナダに出かけ、イギリス・フランスに渡り、公的健康保険でタダで医者にかかれる制度がどの国にもあることに驚く。「ないのはアメリカだけ」と。そして資本主義の敵、社会主義のキューバに、アメリカで見放された病人とともに渡り、病院の窓口を恐る恐るたずねる。するとキューバ市民でないのに親切に診察され、適切な治療を受け薬をもらい、会計で「タダ」と言われてびっくりし、感激する。「地獄の沙汰もカネ次第」のアメリカとは違う、「カネとは関係なく命をまもってくれる」社会があること、そしてそれが世界の趨勢であることを知る。

さて、わが日本はどうだろう。いつの間にかみんな3割負担になり、部屋代・食事代まで上乘せとなった。かつて70年代は、初診料800円払えばあとはタダだったのに、どんどん「アメリカ化」している。年寄りには病院に3ヶ月と置いてもらえない。来年から75才以上の老人は、全員「後期高齢者医療」に強制的に入れられ、年金から保険料を天引きされる。介護施設に入れば月20万円も取られる。生活保護を切られ、餓死する人が相次ぐ。大金持ちと貧乏人への二極化は、もう誰の目にも明らかだ。

いまわが日本は、失敗が明らかなアメリカ的な経済、世界から孤立したアメリカ政治にベッタリしがみついたまま、思考停止している。これをせめてヨーロッパ並みの「人間優先」に切り替えることが緊急に求められている。